

AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD
国際耕種株式会社
 〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーペイン平本 403
 TEL/FAX: 042-725-6250 Email: aai@sk9.so-net.ne.jp

3年ぶりのハラレで考えたこと

1995年1月に初めてハラレ（ジンバブエ）に行ってから、今回3年ぶりにまた行く機会があった。今回の訪問で一番強く感じたのは物価が非常に高くなったことで、3年前と比べて（ジンバブエ\$ベースで）2倍以上になっているようだ。行く直前にも新聞報道などで、「首都ハラレで食糧などの物価急騰に抗議して、数千人が暴動」、というニュースが流れた。特に、昨年後半からジンバブエ\$がUS\$に対して急落したことが理由で、食料品や日用品の値段が急騰したようである。3年前の為替レートや、いくつかの物の値段の資料が手元にあったので今回と比較して紹介する。

項 目	1995年1月		1998年4月	
為替レート	1US\$=100円=8 Z\$ (1 Z\$=12.5円)		1US\$=130円=15 Z\$ (1 Z\$=9円)	
ホテル代 (4~5 Stars)	500~800 Z\$ (6,250~10,000円)		—	
ホテル代 (3 Stars)	—		780 Z\$ (6,800円)	
ホテル代 (地方都市)	250 Z\$ (3,125円)		470 Z\$ (4,100円)	
FAX (A4 1枚、日本へ)	30 Z\$ (375円)		65 Z\$ (565円)	
ワイン (南ア産中級品、720ml)	30~60 Z\$ (375~750円)		60~120 Z\$ (500~1,100円)	
食事 (Chinese Restaurant)	50~70 Z\$ (625~875円)		100~120 Z\$ (870~1,050円)	
食事 (ハンバーガー 1個)	7~10 Z\$ (90~130円)		20~25 Z\$ (175~220円)	

蛇足になるが、ジンバブエでいつもいいなと思うのは、ビンのリサイクル（デポジット）制度で、例えばビンビールの場合、1本約7Z\$（350ml）だが、空きビンを持っていくと1.3Z\$返してくれる。売値の約20%がビン代（デポジット）である。トラックやタクシーのドライバーは、常にコーラのビンを足元にかけている。ただ最近、アルミ缶のコーラやビールが出回ってきており、気になるところである。

現在ジンバブエでは、都市部30%、農村部70%、とされている人口比率が、いずれ近いうちに逆転するだろうといわれている。日本や他の先進国でもそうであったように、今世界中の途上国で起こっている都市部への人口流入（Urbanization）がここでも問題になってきている。ハラレの治安が以前より悪くなってきているのは、それと関係があるだろう。華やかな暮らしにあこがれて都会に出てきたものの、現実はその甘いものではなく、職にもあぶれてしだいに転落していく者もいる。自転車が欲しいために人を殺してしまう、と聞いた。拳銃欲しさに警官を襲う、日本の中学生とは違った別の「心のすさみ」がここにはある。

いうまでもなく、都市問題と農村問題は表裏一体のものである。都市部への過剰な人口集中によって都市環境が悪化し、またその結果として農村部が過疎によって疲弊し、農村社会や自然環境が破壊される前に、我々は何ができるのだろうか？
 （ハラレにて：湖東）



「大都会」ハラレのビル群



「ハット」と呼ばれる農村部の住居

湾岸産油国に対する技術協力の実績及び今後の課題（5）

第5回：ドバイ市郊外修景緑化プロジェクト

アラブ首長国連邦では1970年以降急速な都市化が進められ、70年代の後半にかけては空前の建築ラッシュとなった。80年代になると、道路や都市周辺の樹林造成により飛砂防止や都市内の修景的な緑化をはかるといふ都市生活の環境保全のための緑化に力が注がれるようになってきた。こうした環境緑化活動の一つに、ドバイ市郊外修景緑化プロジェクトがある。この事業は、1985年に開始されたもので、新しいパレスを中心とした計画的な街造りが進められているナディシバ地区における都市計画の一環に組み込まれた緑化事業である。事業内容はパレス周辺を取り囲む防風林とアクセス道路沿いの修景林等の造成およびパレス内の飾花であった。

国際耕種株式会社は当初から本プロジェクトに参加する機会を得た。植林地の造成、灌漑施設の設置、苗木の生産・植栽といった通常業務に加えて、土地条件に応じた樹種の選択、幼苗保護育成のための工夫、要素欠乏やラクダの食害への対策といった技術面での助言を行った。さらに、全体計画の企画・策定、資機材の搬入から人事にいたるまでプロジェクトの運営そのものにも携わった。従来産油国では、最初に大まかな計画を立てるだけで、作業内容は当日になってトップにたつアラビア人のひと声で決められることが多かった。また産油国では、ほとんどの現場作業は外国人労働者によって実施されている。こうした中で我々日本人は、現場労働者の声も聞きつつ、トップのアラビア人に対する助言も出来る位置にいた。従って、技術的な助言に加えて、毎日の現場作業を計画通りに進めることが出来るような調整を行うことも極めて重要な業務であった。このように、トップの要求を的確に理解し、多国籍の労働者集団をうまく組織化し、技術的にも適正な助言を与えることにより、かなり効率的な現場作業を展開することが可能となった。

今後の産油国における技術協力を考えた場合には、本緑化プロジェクトのようにお互いが対等の立場に立ち、技術面だけでなく運営面での助言も与えて行くといったやり方が望ましいように思う。こうすることによって、日本と産油国のどちらにとっても有益で、かつ効率的な協力が継続できるのではなかろうか。

育苗圃場



外国人労働者



85年の植栽状況



91年の生育状況

ドファールの農業（５）

第５回：「ドファールの農産物の循環」についての意味

これまでドファール州内の各地域の農業の現状について個別に報告してきた。各地域の特徴を簡単にまとめると次のようになる。

- 1) Salalah（海岸平野）： 伝統的野菜・果樹栽培と近代的牧草栽培による酪農
- 2) Jabal（山岳地域）： 伝統的肉牛・らくだの放牧
- 3) Nejd（砂漠地帯）： らくだの放牧と近代的牧草栽培

ただ、これら各地域の農業は大きな絡みを持ちながら、また相互補完的に関連して成り立っている。下表のように各地域で生産された主要産物は、食料や肥料、飼料としてそれぞれの農牧業生産活動を成立させている。ただ、これら産物の流れはもちろンドファール州だけで完結できるものではないが、地域依存量は結構大きいのではと考えられる（化学肥料は例外的に扱った）。

	Salalah へ	Jabal へ	Nejd へ
Salalah から		農産物、ミルク製品 魚類飼料	農産物、ミルク製品
Jabal から	肉、ミルク原料 家畜堆肥		肉、家畜堆肥
Nejd から	牧草、らくだ肉	牧草	

また、もう一点付け加えたいことは、この相互補完作用は近年になると益々強くなってきていることである。言葉を変えると、各地域の農業活動は単独では成り立たず、分業化されつつあることだ。これまで長い間、各地域の生産活動が地域完結的状況で行われてきたが、生産活動の拡大とともに、その地域完結の範囲が次第に拡大しているように感じられる。地域完結型は持続性をもつが、生産量が少ない。反面「近代化」と言う名のもとでの最近の農業生産は増加しているが、これまで持続的と言われて行われてきた伝統農業の形態を壊しつつあるように感じられる。

両者の良い所を合わせると「持続的近代農業」だが、まさにこれがこれからの農業の求められる方向と考えても良いのではないか。今回は「ドファールの農業」最終回でまとめとし、今後のドファ



サララ近郊で売買されたJabal産の牛糞堆肥



サララ近郊で売られる牧草

ールの農業の方向性について紹介したい。

ある夜のドバイでの語らいからの随想（湾岸諸国の今後）

UAE滞在中のある夜の事。その夜もいつもの週末と同じく、単身赴任のパキスタン人の友人を訪ねていた。その夜は友人宅に彼の古い友人が2人ほど訪ねて来て、聞けば彼らは大学の同窓生同士。卒業後3人は揃って本田技研のパキスタン法人に就職したのだという。3人の内2人は経済専攻で、間もなく銀行に転職し、工学専攻のラシッド氏のみが現在でも、その関連の仕事をしている。その時、氏はドバイに新しい組立工場を作る計画があり、その関連で来ていた。それについての氏の考え方に、湾岸での技術協力の方向性について示唆する所が多かったので紹介する。

UAEは豊富な石油資源を利用し、アルミニウムの生産が多い。そのアルミニウムを用い単車をドバイで生産する。マーケットはパキスタンを中心にその周辺諸国。こうした場合、そこで働く工員は大半がパキスタン人となるだろう。このプロジェクトでUAEは大きな投資をすることなく、加工用アルミニウムを提供し、できた製品の輸出はドバイの十八番である。よってドバイ（UAE）にとっては悪い話ではないと思われる。パキスタンにとっても、パキスタン法人で働くパキスタン労働者を通じ、パキスタンに資本は戻ってくるので、悪い話ではないと思われる。そして治安が良く、この地域の商品流通に精通したドバイに工場を構えることはパキスタン本田にとっても嬉しいことと思われる（恐らく、部品の供給をするであろう日本の本田にとっても）。当事者総てにとって良い話となる可能性がある。

産油国のUAEは安価なエネルギーと原材料を有し、社会・経済は安定し、またインフラの整備は申し分なく、労働力の調達容易で、更には多大な人口を抱えるインド、パキスタン及び中央アジア、アラブ、アフリカ圏に細かな流通網を張り巡らし、ある種の企業にとっては進出先として理想的な条件がそろっていると云える。また将来に国民の雇用不安を抱えるUAEにとっても新たな雇用機会を創出するこうしたプロジェクトは望むところと思われる。

今までの企業の海外での生産拠点の設立は、主に途上国の安い人件費をあてにしたのものであった。こうした企業の海外進出は東南アジア、東アジアの国々に見られるような経済発展の一つの原動力となった。その反面、こうした経済発展は、都市部と農村部の経済的格差の拡大、環境破壊等の諸問題をもたらし、ついには最近の経済危機を招いた。UAEが生産拠点となると、労働者を提供するであろう途上国は、オイルにより裏打ちされた湾岸諸国の貨幣を介してマーケットと繋がる事になり、現状より少しは経済的に安定するのではと考えられる。また環境への影響を十分調査する必要があるが、そうした工場進出が可能な敷地に恵まれている。

このように書くと良いことばかりの様であるが、問題点もある。先ず第一に労働者の労働条件である。現在の湾岸の労働条件は組織によりまちまちで、法により定められた基準はあるが、余り守られていないようだ。世界の工業団地たるには労働環境の整備が必要だ。そこで働く労働者も受益者とならなければ意味がない。また湾岸諸国はほぼ全域が極度に乾燥した砂漠地帯で、そのために工業用水の確保も問題となろう。

以上の問題をクリアした上で湾岸諸国が単なるエネルギー供給基地としてのみならず、世界の工業地帯として発展する事はどうだろう。（ドバイにて：阿部）



UAE、アブダビの街並み。石油関連、建設関連、商社等の進出が盛んである。